

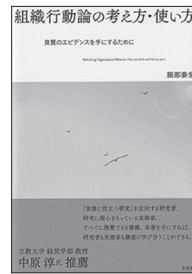
服部 泰宏 著

『組織行動論の考え方・使い方』

——良質のエビデンスを手にするために

松永 伸太郎

(公立大学法人長野大学企業情報学部助教)



●有斐閣
2020年9月刊
A5版・406頁
定価4290円(本体3900円)

●はっとり・やすひろ
経営研究科准教授。
神戸大学大学院経

本書は、組織行動論の体系的なテキストである。「組織の中の個人や集団の行動・態度の研究」(p.4)として、組織行動論はこれらの行動・態度を説明するさまざまな水準の組織現象に着目する。目次にある個別トピックを挙げるだけでも、「リーダーシップ」「組織の中の公正」「欲求とモチベーション」「人的資本、社会関係資本、心理的資本」「組織と個人の心理的契約」「組織コミットメント、ジョブ・エンベデッドネス」「組織行動の成果(行動的成果・態度的成果に関する諸変数)」などが体系的に取り上げられている。

本書を読んで、このように自らの専門領域を体系的に説明する手腕と知見の広さ・深さに感銘を受けたというのが第一印象だ。評者の専門は労働社会学だが、数年後に同様の書籍を書けるかといえば、そのような自信は持てない。他分野ではあるが、この読書経験を経て今後目標とすべき研究者に出会うことができたと思う。

そのうえで、本書を読んで気になった点を限られた紙幅の範囲で一つだけ述べたい。それは本書のタイトルに含まれている「考え方」と「使い方」が、どのように結びついているのかが少し分かりにくかったように感じるという点である。本書を読めると、上記のように組織行動論における個別トピックが並んでいるのとは別に、実践家が経験則として持つ「しろうと理論」に研究者がどのような立場を採るべきかかなりの紙幅が割かれている。これは「使い方」に関わる部分だと思う。著者は、「しろうと理論」と科学知の目的や性質等が異なることを前

提としたうえで、両者の理論をいかに共振させることができるかについて、具体的なフィードバック手続きの助言等も含めて、事細かに説明している。

著者は「しろうと理論」が科学知に比較して劣っているわけではないと読者に注意を与えつつ、次のように述べている。「現実の経営現象を理解するにあたっては、科学知が示す理論の世界や、科学知に基づく調査によって写像される現実世界といった、複数の世界を持つ必要があるのではないかということであり、それによってこそ、実践家の持つしろうと理論(実践知)は鍛え上げられるのではないか」(p.51)

これらの記述からも実に学ぶところが多かったが、少し腑に落ちなかったように思うのが、なぜ組織行動論では「測定」という研究法がこれほどまでに重視されているのかという点である。これは、組織行動論の「考え方」に関わる部分だろう。評者はエスノグラフィックな質的調査法を重視しているが、著者のしろうと理論と研究者の理論との関係性の主張について、むしろ共有できると感じた部分の方が多い。しかし、そうした実践家と研究者の生産的な関係性が、質的研究で実現できないとは思わない。現場の実践を撮影したビデオデータを実践家と共に分析することによって知見を産出することが評者の関わるエスノメソドロジー・会話分析の領域ではよくなされるし、直接実践家と顔を合わせることもなくとも、ある産業や職業における歴史的なプロセスの分析などでも、実践家の省察を促して「しろう

うと理論」が鍛え上げられることもあるかもしれない。

著者は、こういった疑問を想定してか、「測定」の意義として「最近の新人は会社へのコミットメントが低い」といった「感覚的な議論」を越えて、「今年の新入社員のコミットメントは、昨年と比べて0.5ポイント低い」といった、「より正確な議論」ができるという指摘を行っている (pp. 67-68)。しかしこれも、「しろと理論」を鍛え上げられるための一つの手段以上のものではないと思う。

思うに、ここでの「測定」へのこだわりには、組

織行動論の「考え方」が深く関わっているのだと思う。行動科学的な議論を下敷きをしているなど、学問的経緯も関わっているのかもしれない。しかし、こうした「考え方」と著者が手厚く論じる「使い方」に関する議論がどのように結びついているのかについてもう少し説明をなされていたのならば、評者のような門外漢にもより腑に落ちる部分が多かったと思う。とはいえ、組織行動論を学ぼうえでの必読テキストであることは間違いないので、ぜひ多くの方に手に取ってもらいたい。